

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

# Funky Corner

文・撮影●波多利朗 text and photo by Hata Toshiro

(URL) <http://www.funkygoods.com/>

(E-Mail) [catty@mxp.mesh.ne.jp](mailto:catty@mxp.mesh.ne.jp)



## 濃い系Psionの世界 (其の3)

# Psion空前絶後の変態マシン、MC600

### 前振りを書く スペースが!!!

今回という今回は、前フリが書けなくなってしまった! そりゃ、書くことはあるのだが、本編で目いっぱい分量になってしまい、毎度お馴染みの、何の役に立たないオタクネタを書くスペースが、まったく無くなってしまったのだ! 前フリ命の筆者にとって、これは由々しき問題だ! でもまあ、仕方ないねえ……。というわけで今回はいきなり本編スタート!

### Psion MC600 というマシン

実は、本誌前号の「おわりに」で、次号予告としてOrganizer-I、IIをご紹介する予定と書いてしまったのだが、若干変更する。というのも、たまたまPsion MC600が入手できてしまったからだ。MC600とは、知る人ぞ知るPsion空前絶後の変態マシンであり、ある意味失敗作でもあり、激レアモデルとしても有名な製品だ。これを紹介せずして死ぬことはできない! というワケで、緊急特集を組むことになった次第だ (001)。

さて、Psionの初期PDAは、良く知られているようにOrganizer-I、Organizer-IIがあるが、1989年になり、突如としてこれまでの路線とはまったく性格が異なる端末が発売になった。これがPsionのMobile Computerシリーズ、MC200、400、そして600である。

WEB上での調査の結果、MCシリーズ (200、400、600) の発売時期は、どれも1989年9月26日となっている。どうやら3シリーズ同時に発売されたようだ。このうち、200と400は、OSにEpcocを搭載したモデルで、液晶画面の解像度がそれぞれ異なっているものだ。しかし、600だけはまったくの別物で、OSにMS-DOS Ver 3.22を搭載し、CGA液晶画面を持った立派な「謎ば〜機」であった。

Psionと言えばEpcoc OSである。このPsion仕様が少し崩れたモデルが、実は前回ご紹介したHC110 (HCシリーズ) であり、OSこそEpcocを搭載していたものの、ジュエルシェルは被さっておらず、コマンドラインで操作するという、若干変態マシンだった。

ところが、今回ご紹介するMC600に至っては、Psionの特徴であったEpcoc OSすらも搭載していない。よりによって、あの天下のマイクロソフトの、MS-DOS Ver3.22をROMで搭載しているのだ。当時、Epcoc OSにあこがれてPsionを使っていたファンにとって、このMC600がどう



001

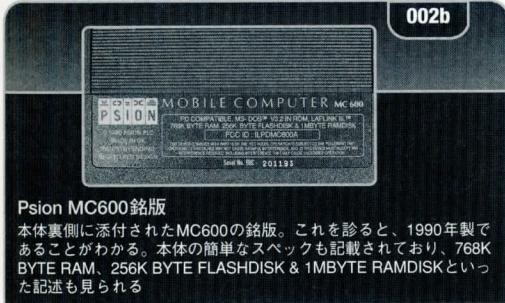
**Psion MC600の外観**  
これがPsion製MS-DOSマシン、MC600。大きさはA4ノートパソコンほどあり、かなりでかい。VGAのように見える液晶画面は、実はCGA



002a

### Psion MC600のケース 上部

PDAで見慣れたPsionのロゴと、MOBILE COMPUTER MC600の文字が見える。持ち運びに考慮した取っ手付き。外観を見る限り、Psionらしい特徴は感じられない



002b

### Psion MC600铭版

本体裏側に添付されたMC600の铭版。これを診ると、1990年製であることがわかる。本体の簡単なスペックも記載されており、768K BYTE RAM、256K BYTE FLASHDISK & 1MBYTE RAMDISKといった記述も見られる

目に映ったのかは想像に難くない。そういったわけで、このMC600というマシンは、発売当時不振に終わり、早々に市場から姿を消してしまった。

こうした経緯もあり、MC600は現在では極めて入手困難な製品となってしまった。

さて、Epos OSこそ搭載していないものの、MS-DOSとCGA画面の組み合わせとなれば、これはもう立派な「謎ば〜機」の世界だ。Psion Series3以前の、初期Epos OSでは不可能であったOSレベルでの日本語化も、謎ば〜機となると、とたんに道が開ける。古今東西、ゲロゲロに怪しい謎ば〜機の日本語化に、異常な執念を燃やしてきた輩にとっては、もってこいのオモチャとなるワケだ。ということで、今回はDOSマシンPsionで、思いっきり遊んでみることにしよう！

## MC600のハードウェア

Psion MC600は、B5サブノートパソコンの傑作(だと筆者は信じて疑わない)、HP OmniBook 600Cよりも一回り大きく、一般的なノートパソコンより若干小さい。このパソコンが発売されたのは1989年である。1989年といえば地球防衛組織S.H.A.D.O.が設立されてから既に9年が経過しており(こればっかだな >オレ…… ^ ^);、ATARI PortfolioやPoqet PCといった名だたるDOSベースのパームトップパソコンが発売された記念すべき年である。謎ば〜元年とも呼べるこの年に、Psionから、こともあろうに



003

### Psion MC600のキーボード

十分なキーピッチとストロークを持つMC600のキーボードは、高速タッチタイピングにも適しており、非常に使いやすい。この製品の最大の特徴である

MS-DOSベースのCGAマシンが発売されたというのも、今考えると何かの因縁であろう。ちなみに、どうでも良いことだが、S.H.A.D.O.は Supreme Headquarters Alien Defence Organizationの略称である、って、ホントどうでも良いことだな……(002a、002b)。

それとはもかく、MC600は当時出始めたパームトップパソコンのように小型化を追求せず、あくまで拡張性と使いやすさを重視して設計されたマシンであった。実物を目にする、思っていた以上に大きいのでびっくりする。さらに持ってみれば、単三乾電池を8本も使用していることもあり、かなり重い。まるで初期のノートパソコンそのものである。左右に設けられたロックを操作して液晶パネルを引き起こすと、デスクトップパソコン並の大きさを誇るキーボードが現れる(003)。

MC600の特徴の1つは、この押しやすいキーボードだ。クリック感は無いため、十分なピッチとストロークが確保されているため、タッチタイピングは極めて容易である。キーボードはメインのQWERTY部の他に、ファンクションキー部分、トップのキーパッド部分、右側キーパッド部分で構成されている。ファンクションキーは10個搭載されている。トップのキーパッド部分は、電源キーやNumLock、ScrollLockといった制御キーが配置される。右側に設けられたキーパッド部分には、LCDの濃度調整キーがある。LCD濃度はかなり細かく調整できるようになっており、液晶画面は見やすい(004)。

トップキーパッド部分の右側には、小さなLCDによるステータススクリーンがある。ここでは、CapsLock、NumLock、ScrollLockキーの状態表示と、バッテリー警告灯、及びスタンバイモードが表示される。通常であればLEDで済ませてしまうところであるが、わざわざ液晶表示を使うところが凝っていると言えよう。ファンクションキー上部に不思議な空間があるが、これは何のことは





004

**本体右側のキーボードとステータス表示用液晶**  
 本体右側には液晶画面の濃度調整用ボタンなどの制御キーが配置される。また、マシンとキーボードの状態を表示する小さな液晶のステータススクリーンも搭載されている

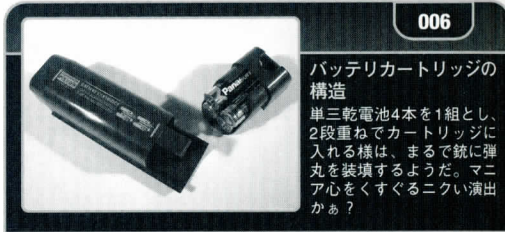


005

**バッテリーカートリッジの搭載状況**  
 本体裏側の黒いボタンを押すと、単三乾電池が8本入ったバッテリーカートリッジが取り外せる。このカートリッジの脱着は極めて簡単。良くできたメカである

無い、ファンクションキーの割り付けを記入した紙を挟んでおくスペースだ。

MC600のメインバッテリーはカートリッジ式となっている。本体裏面の黒いボタンを押すと、単三乾電池8本を格納したカートリッジが分離される。カートリッジに8本の電池を挿入する方法は、極性に注意する必要がある。どうでも良いことだが、このカートリッジを設計した人は、きっと軍事マニアに違いない。カートリッジに電池を格納していると、あたかも銃に弾丸を装填しているような気分になってくる。カートリッジは細かい部分まで良くできており、取り外した状態でACアダプタによりバッテリーを充電することもできる (005、006)。



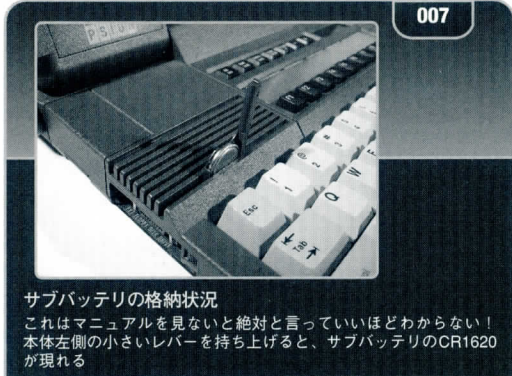
006

**バッテリーカートリッジの構造**  
 単三乾電池4本を1組とし、2段重ねでカートリッジに入れる構は、まるで銃に弾丸を装填するようだ。マニュアルをくすぐるニクイ演出かあ？

もあり、拡張性は高い。SSDスロットは本体左右側面に配置されている。それぞれのスロットには、縦に2個のSSDが挿入できるようになっている。後述するように、SSDドライブにはE~Hの4ドライブが割り振られている。SSDにはRAM、Flash EPROM、ROMのいずれも使用することができる。マニュアルによれば、使用可能なRAM SSDの最大容量は512KBとなっているが、Psion Series3上でフォーマットした1MBのRAM SSDを挿入したところ、問題無く使用できた (008)。

バックアップ用のサブバッテリーの搭載位置は、マニュアルが無いとわからないようなところにある。この辺は前号でご紹介したHC110と良く似ている。サブバッテリーは本体上面左側、スピーカが付いているスリット部分に搭載される。左側面にちょっとだけ出ているレバーを押上げると、バックアップバッテリー (CR1620) が現れる仕組みだ (007)。

Solid State Disk (SSD) を搭載するスロットの数は4つ



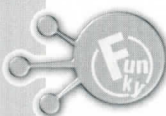
007

**サブバッテリーの格納状況**  
 これはマニュアルを見ないと絶対と言っていいほどわからない！本体左側の小さいレバーを持ち上げると、サブバッテリーのCR1620が現れる



008

**本体左右に設けられたSSDスロット**  
 SSDは本体左右に2枚ずつ、計4枚装着できる。このスロットはDOS上の論理ドライブとしてE~Hが割り振られる





### プリンタポートとRS-232Cポート

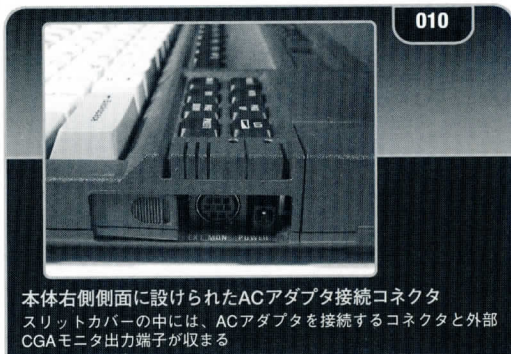
本体背面のカバーを開けると、I/Oポートが現れる。ポートは本体左右に配置されており、プリンタポートとRS-232Cポートは最初から入っているが、もう1つのポートはダミーとなっていて、後からオプションで搭載することができる

搭載される。これらのポートは本体固定となっているので、取り外しはできない。一方、背面左側には拡張用のポートが設けられている。標準ではダミーのポートが入っており、オプションの拡張ポートに付け換えることが可能となっている (009)。

本体左側側面のスリットカバーの中には、外部FDDユニット接続用コネクタが格納されている。また本体右側面にはACアダプタの接続コネクタと、外部CGAモニター接続コネクタが、同じくスリットカバーの中に格納される。リセットボタンはACアダプタ接続コネクタの近く、本体上面にある電源ランプの下に位置する (010)。

このマシンには外付けFDDユニットとしてMEMOREX製のものが付いてきた。このFDDユニットはモバイル対応となっており、内部に7.2VのNi-Cd充電電池を内蔵している。ACアダプタをFDDユニットに接続した状態で、FDDユニットをMC600に接続すれば、FDDユニット経由でMC600にACアダプタ電源が供給されるようになっていく。このあたりの設計は良く考えられている (011)。

MC600の最大の特徴は、前述したようにMS-DOSをROMで搭載していることであろう。これが普通のメーカーであればどうということも無いのだが、あの天下のPsion製端末だと話が異なる。搭載しているMS-DOSはVer.3.22。同年に発売されたATARI Portfolioは、MS-



### 本体右側側面に設けられたACアダプタ接続コネクタ

スリットカバーの中には、ACアダプタを接続するコネクタと外部CGAモニター出力端子が収まる

DOS互換のDIP OS Ver.2.11を、また、Poqet PC ClassicにはMS-DOS Ver.3.30が搭載されていたことを考えると、両者のちょうど間と考えることもできる。

次ページに、Psion MC600の仕様を示す。

## MC600の動作環境

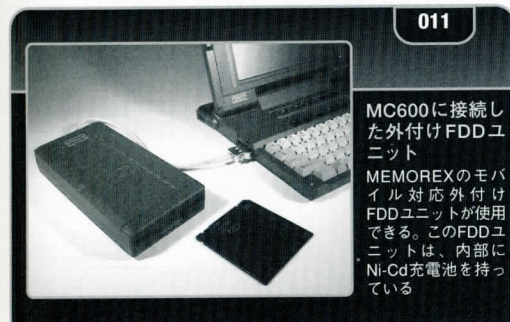
次にMC600の基本的な動作について調べてみよう。MC600はMS-DOS Ver.3.22をROM搭載したマシンであり、初期状態で起動させると、config.sysもautoexec.batも登録されていない、スプリンの英語DOSが起動する。

電源を入れると、まず最初に下記のBIOSクレジットが画面に表示される (012)。

```
8088/86 Modular BIOS Ver S3.1c 18/09/90 11:37
Copyright(c)1984-89 Award Software Inc.
Psion MC600 Custom BIOS V1.08F ENG
Copyright(c) 1990 Psion PLC.
```

```
SIZING SYSTEM MEMORY ...640K FOUND
```

次に、date、timerの入力を求められ、以下のクレジットが表示された後、MS-DOS Ver.3.22が起動し、コマンドプロンプトが現れる。



### MC600に接続した外付けFDDユニット

MEMOREXのモバイル対応外付けFDDユニットが使用できる。このFDDユニットは、内部にNi-Cd充電電池を持っている



### MC600のパワーオンリセット直後の画面

起動直後に現れるBIOSのクレジット画面

Microsoft(R) MS-DOS(R) Version 3.22  
 (C)Copyright Microsoft Corp 1981-1989  
 Licensed to Psion PLC  
 All right reserved

C>\_

これを見ても判るように、確かにMicrosoftがPsion PLCに正式にライセンス供与した正真正銘のMS-DOS、しかもVer 3.22が搭載されている。さて、この状態でMC600の内蔵ドライブの状況をチェックしておこう。

- ・ Aドライブ : 外付けFDDドライブ
- ・ Bドライブ : 外付けFDDドライブ
- ・ Cドライブ : 1,040,896byte (約1MB) のRAMディスク
- ・ Dドライブ : 250,669byte (約245KB) のROM/RAMディスク
- ・ Eドライブ~ : SSDドライブ (容量はSSDディスクによる)
- ・ コンベンショナルメモリ : 654,336byte (約640KB)

AドライブとBドライブは、あらかじめ外付けFDDユニットの使用が想定されている。付属してきたMEMOREXのFDDユニットを接続する

## ● Psion MC600

モデル名称	MC600
メーカー	Psion
発売年	1989年9月26日
CPU	intel 80C86 4.77MHz/8MHz (動作速度を切り替え可能)
内蔵メモリ容量	Flash : 256KB (Dドライブとして搭載) Work-RAM : 768KB (640KBをMS-DOS動作として使用)
ディスプレイ	RAMDISK : 1MB (Cドライブとして搭載) 640×200ドットモノクロCGA LCD 【アクティブエリア : 210mm×130mm】
キーボード	QWERTY 61キー・キーボード+25補助キー
I/Oポート	シリアル×1 (COM1) 専用コネクタ使用 パラレル×1 (LPT1) D-Sub 25Pin メスコネクタ使用 (オプションでCOM2、モデムを追加搭載可能) 外付けFDDドライブコネクタ 外部CGAモニタ接続端子
バッテリー	メインバッテリー : 単三乾電池 8本 (アルカリ乾電池もしくはNi-Cd乾電池を使用可能) サブバッテリー : リチウムボタン電池1個 (CR2016使用)
SSDスロット	4スロット搭載 (RAM、Flash EPROM、Program ROMの各ディスクが使用可能)
サイズ	314 (W) × 227 (D) × 49 (H) mm
重量	2.16kg (乾電池を含む)
内蔵ソフトウェア	MS-DOS Ver3.22 ROM Version、Lap-link、Alias、Editor、PIM Software
ACアダプタ	別売り (12V DC)

と、Aドライブとして自動認識される。

CドライブはRAMディスクとなっており、バックアップ電池が切れると内容は消えてしまうので注意が必要だ。スプニングの初期状態では、このドライブには何も格納されていない。

DドライブはDOSのCOMMAND.COMや、MC600に内蔵されている各種のアプリケーションソフトウェアが格納されている。ここには、簡易テキストエディタである「EDIT」やバッテリーの消耗状況を把握する「BATMON」、またMC600の環境設定を行うユーティリティソフト「PSETUP」等が格納されている。いずれも英語版のユーティリティである。

MC600の環境設定を行うソフト、PSETUP (Psion Setup) を実行してみよう。起動すると、画面一番上には

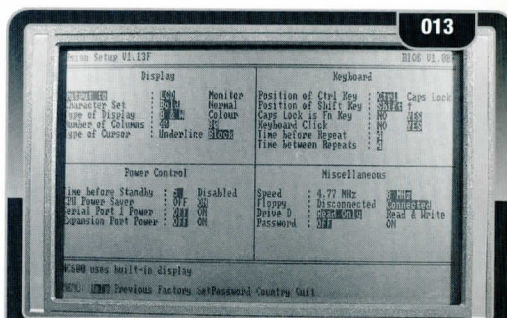
Psion Setup V1.13F  
BIOS V1.08F

とバージョン情報が表示され、「Display」「Keyboard」「Power Control」「Miscellaneous」の4分割された画面が出力される (013)。

「Display」セクションでは、表示装置としてLCDディスプレイを使用するか、もしくは外付けのモニタを使用するかを選択できる。本体右横の専用外部モニタ出力コネクタを介して、外付けのモニタも利用できるのだ。

「Power Control」セクションでは、シリアルポートと外部拡張ポートへの電源供給制御が行える。モバイル機器としては基本的な設定だ。

「Miscellaneous」セクションでは、CPUスピードとして4.77MHz/8MHzのどちらかが設定可能だ。またDドライブを読み取り専用として用いるか、読み書き可能として用いるかの設定も行うことができる。



### PSETUP (Psion Setup) 起動画面

PSETUP (Psion Setup) では、Psionの各種環境設定を行うことができる。このアプリケーションは標準ソフトとしてMC600の中に入っている

014



### バッテリーモニタBATMONの起動画面

コマンドライン上でBATMONを起動させ、その後Ctrl+LCDキーを押すことで、画面上にバッテリーモニタ画面をPOP-UP表示させることができる。かなり詳細な状況を表示してくれるので、便利なツールだ

MC600はモバイル機器であるため、内蔵バッテリーの状態は常にモニタできるようになっている。この機能を行うアプリケーションが「BATMON」だ。BATMON（バッテリーモニタ）プログラムは常駐ソフトである。起動させるとメインメモリに常駐し、Ctrl+LCDキーを押すことで、現在のバッテリーの状態を画面上に表示することができる。バッテリーはメインとバックアップの2つがモニタでき、メインバッテリーは残り使用可能時間が、またバックアップバッテリーはバックアップ可能な日数がグラフとして確認できる（014）。

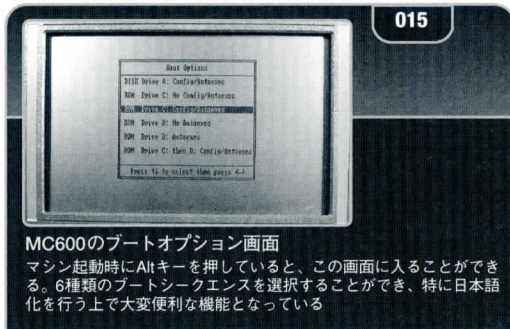
Eドライブ以降は、SSDスロットに割り振られている。MC600の場合、SSDスロットは左右2基ずつ、全部で4基搭載されており、このすべてにSSDを挿入すると、E～Hの各ドライブが生成される。どのスロットがどの論理ドライブに相当するかは、あらかじめ決まっており、たとえば左上のスロットを用いるとそこはEドライブとして認識される。なお、MC600ではフラッシュ、RAM、アプリケーションの各SSDを用いることが可能だ。

さて、MC600にはブートオプション画面が用意されている。これは、リセットスタート時、起動中にAltキーを押し下げていると出力されるもので、どのドライブに格納されているconfig.sys/autoexec.batファイルを参照するかを選択することができる。これは後述する日本語化作業において、大変便利な機能となっている（015）。

### Boot Options

```
DISK Drive A: Config/Autoexec
ROM Drive C: No Config/Autoexec
ROM Drive C: Config/Autoexec
ROM Drive D: No Autoexec
ROM Drive D: Autoexec
ROM Drive C: then D: Config/Autoexec
```

015



### MC600のブートオプション画面

マシン起動時にAltキーを押しているとき、この画面に入ることができる。6種類のブートシーケンスを選択することができ、特に日本語化を行う上で大変便利な機能となっている

## MC600の日本語化

MC600はCGAのLCD画面を持ち、MS-DOS Ver3.22をROMで搭載した立派な「謎ば〜機」である。従って、その日本語化には、謎ば〜3,000年の歴史が育んだDOS/C化により、可能であることは容易に想像が付く。確かに最初このマシンを見た時は、そう楽観していたのだ。ところが！である。このMC600のDOS/C化には予想以上の困難が待ち受けていたのだ。詳細をここにレポートすることは、紙面の都合上できないが、とにかく手こずったことは確かである。

結果がわかると、どうということはないのだが、ポイントを下記に示しておく。

- ・謎ば〜機DOS/C化の際、ディスプレイドライバとして広く利用されているyadc.exeは、MC600では使えない
- ・ディスプレイドライバには、dispc.sysの最新版（Ver 0.15）を用いる
- ・ドライバ組み込みの際、フリーソフトのadddev.exeは使えない
- ・fontx形式のフォントしか使用できない

それでは、さっそく日本語化を行ってみよう。

### ①必要なファイルの入手

DOS/C化のために必要なファイル類は、現在、フォントファイルを除くすべてのドライバソフトが、インターネット上のソフトウェアアーカイブである「Vector (<http://www.vector.co.jp/>)」サイトで入手できる。以下に必要なファイルを示す。

#### ・フォントマネージャ

fontman.exe Ver1.2.9

HP100LX用の日本語フォントマネージャとして開発さ

れたドライバで、謎ば~機のDOS/C化には必要不可欠のものである。

## ・ディスプレイマネージャ

dispc.sys Ver 0.15

CGA用の日本語表示ドライバ。8086/88 CPUでの動作を前提としており、80186 以上の命令は使っていないため、古いマシンでも利用できる。なお、通常謎ば~機ではyadc.exeを用いるのであるが、今回はMC600のビデオ周りとの相性問題から利用しない。

## ・DBCSDUMY

dbcscdumy.sys Ver1.02

MC600ではDOS Ver3.22を使用している。DBCSDUMYは、Ver3.x上でもDOS/V用のドライバが動くように見せかけるためのものである。必須というわけでは無いが、とりあえず入れておくことにする。

## ・PANSI

pansi.sys Ver1.03

ANSI.SYSの互換ドライバ。

## ・日本語フォント

HP200LX日本語化キットの中に入っているフォントを用いる。基本的にfontx形式のフォントであれば問題は無いと思われる。今回は8、11、16ドットの3種類のフォントを用いた。

## ②ファイルのインストール

上記のフリーソフトが準備できたら、次はインストールである。基本的にMC600の内蔵メモリであるCドライブ(約1MB)に日本語化ソフトを格納して行く。日本語ドライバ関連ソフトはDOSCディレクトリに、またフォントファイルはFONTディレクトリを作成して格納する。下記のインストール時のファイル構成を示す。

C:¥

```

FONT— LXHN16X.FNT
        LXZN16X.FNT
        LXHN11X.FNT
        LXZN11X.FNT
        LXHN08X.FNT
        LXZN08X.FNT
    
```

```

DOSC— FONTMAN.EXE
        FONTMAN.INI
        DISPC.SYS
        MODESW.COM
        PANSI.SYS
        DBCSDUMY.SYS
    
```

## ③環境ファイルの設定

ファイルの準備ができたら、環境ファイルを設定する。どれも謎ば~機をいじっておられる方にはお馴染みのプロセスだ。fontman.iniはDOSCディレクトリ中に格納されているファイルを設定する。またconfig.sysとautoexec.batは、Cドライブのルートディレクトリに新規に作成して設定する。具体的な設定内容は下記の通り。

### fontman.iniの設定

```

; fontx2 フォント定義
;
;[fontx2]
c:¥font¥l\xn08x.fnt
c:¥font¥l\xn11x.fnt
c:¥font¥l\xn16x.fnt
c:¥font¥l\zn08x.fnt
c:¥font¥l\zn11x.fnt
c:¥font¥l\zn16x.fnt
;
; font.14 フォント定義 (font.14 を使用する場合)
;
;[font14]
;
;
; 恵梨沙フォント定義 (elisa.fnt を使用する場合)
;
;[elisa]
;
    
```

### config.sysの設定

```

files=20
buffers=20
device=c:¥doscc¥dbcscdumy.sys
device=c:¥doscc¥fontman.exe -fc:¥doscc¥fontman.ini -d
device=c:¥doscc¥dispc.sys

device=c:¥doscc¥pansi.sys /k
device=e:¥egbdosv.sys /E (+日本語FEP導入時の項で解説)

shell=d:¥command.com /e:512 /p
    
```

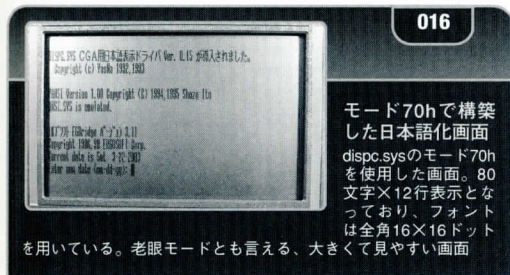
### autoexec.batの設定

```

echo off
path=c:¥d;¥c:¥doscc;¥vz;c:¥bin:e:¥tools;
prompt $p$g
modesw
remapepg (+日本語FEP導入時の項で解説)
    
```

## ④ブートオプション画面の設定

前述したように、MC600ではリセットスタート時にブ



016

モード70hで構築した日本語化画面  
disc.sysのモード70hを使用した画面。80文字×12行表示となっており、フォントは全角16×16ドット

を用いている。老眼モードとも言える、大きくて見やすい画面



017

EGBridgeを組み込んだところ  
エルゴソフトのEGBridgeとREMAPEGPを組み込んだ画面。この状態で日本語FEPを使用することができる

ートオプション画面で、どのドライブに置いたconfig.sys/autoexec.batファイルを参照するかを設定することが可能だ。そこでリスタート時にAltキーを押し、表示されるブートオプションメニューにて

ROM Drive C: Config/Autoexec

の項目を選択する。

以上で日本語環境が構築される。

リセットスタートの後に表示されるDOS/C画面は、謎ば〜機そのものだ。ただ、液晶画面が大きいこと、液晶そのものが非常に見やすいため、謎ば〜機の小さな画面と比較すると雲泥の差がある。画面の大きさとアスペクト比から、一見VGA画面のようにも見えてしまうのだ。

今回は日本語ディスプレイマネージャとしてyadc.exeが使えないため、disc.sysを組み込んでいる。disc.sysは、初期状態でディスプレイモード70h、すなわち80文字×12行の表示設定となっている。このモードでは、全角16ドット×16ドットのフォントを使用するため、文字がかなり大きく見やすいことは確かだが、1画面に表示される情報量が少ない。そこで、autoexec.bat中でmodesw.comというソフトを実行している。このソフトはdisc.sysのアーカイブに同梱されているもので、実行させるたびに、トグル操作でモード70hとモード03hとを切り替えることができる。モード03hに設定すると、80文字×25行表示となり、1画面に表示できる情報量が格段に増加し使いやすい。通常であれば、このモードに設定しておくとも良いだろう (016)。

## 🌀 日本語FEPの導入

次に日本語FEPを導入してみる。既に述べたように、MC600はCPUに8086を使用した、古代のマシンである。従って、80186以上の命令を使用しているソフトは、基本的に使うことができない。このような場合、日本語FEPとして良く用いられるものが、エルゴソフトのEGBridge Ver3.11だ。

EGBridgeは、株式会社アシストが発売していた日本語ワープロソフト、アシストワードに付属していた日本語FEPであり、DOS時代からパソコンを使っていた廃人連中には有名である。なぜこのFEPを使うかと言えば、この超古代のFEPは、8086命令しか使用していないため、MC600上でも問題無く動作するからだ。これと同じ理由で、SHARP PC3000やPoquet PC Classicの日本語FEPとしても用いたことは、本誌2000年春号や冬号でも述べた通りである。

今回はCドライブに余裕が無いため、EGBridge本体はEドライブに挿入したRAM SSDに格納した。必要となるファイルは、下記の通りである。なお、EGBridge関連ファイルは、すべてルートディレクトリに置かなくては動作しないので、念のため……。

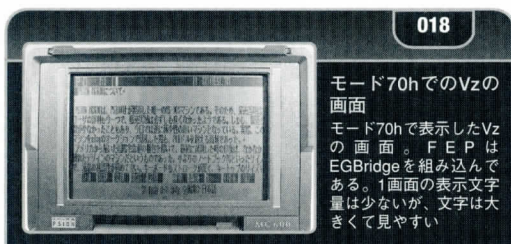
E:\Y — EGBDOSV.SYS  
EGBED.EXE  
EGBSET.EXE  
EGDICM.DIC  
EGDICU.DIC

後はCドライブのルートディレクトリに置かれたconfig.sysに、EGBridgeを登録するだけである。ここで注意しなくてはならないのは、EGBridgeはDOS/V日本語キーボードの使用を前提としているため、間接入力モードの起動時には「Shift」+「変換」キーを押さなければならない。当然、MC600のキーボードには「変換」キーなんて気の効いたものは無いため、なんらかのキーで代用することになる。これを行うフリーソフトが、Madame Fatale氏制作の「REMAPEGP」だ (017)。

autoexec.bat中でremapegp.comを実行させることにより、「Shift」+「変換」を「Alt」+「=」キーに置き換えることができる。このフリーソフトは筆者のHP中に掲載してあるので、利用していただきたい。

関連 HP **REMAPEGP**  
<http://www.funkygoods.com/nazopa/remapegp.htm>

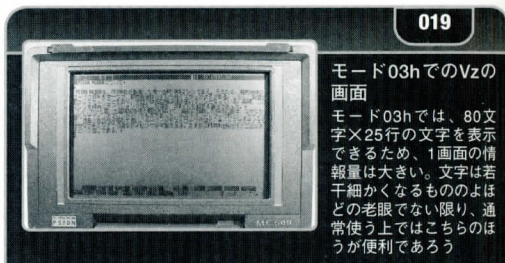




018

### モード70hでのVzの画面

モード70hで表示したVzの画面。FEPはEGBridgeを組み込んである。1画面の表示文字量は少ないが、文字は大きくて見やすい



019

### モード03hでのVzの画面

モード03hでは、80文字×25行の文字を表示できるため、1画面の情報量は大きい。文字は若干細くなるもののよほどの老眼でない限り、通常使う上ではこちらのほうが便利であろう

## MC600の使用感

それでは、日本語環境を構築したMC600の使用感について述べることにしよう。まず最初に注意しなくてはならないことは、日本語FEPはDOSのコマンドラインでは使えない、というか、使うと不具合を生じる。おそらくディスプレイマネージャのdisp.sysと干渉してしまっているものと思われるが、FEPをON/OFFすると、スクロールが効かなくなってしまうのだ。この点さえ気をつければ、後は特に問題は生じていない。

Vzを使用した日本語文書の作成も、変換スピードが若干遅いものの、十分実用として使うことができる。何よりストロークの深いキーボードのおかげで、タッチタイピングが実にやりやすい。大きく見やすい液晶画面と相俟って、大変使いやすい端末であると言えるであろう(018、019)。

ファイル閲覧ソフトとしてDOS/V時代では有名であったMIEL Ver.2.54も、問題なく動作した。しかし、あいにく超有名ファイラーソフトであるFDは、おそらく80186以上の命令を使用しているものと思われ、動作しなかった(020)。

なお、日本語FEPを組み込んだ状態をVMAPで確認すると、約465,344バイトのコンベンショナルメモリが空いていた。

最後に、CGAゲームをインストールしてみた。ロードランナー、プリンス・オブ・ペルシャ、テトリス、石道など、CGAゲームの代表作を試してみたのだが、ご覧のようにどれも問題無く起動した。さすがは謎ば〜互換(?)機、Psion MC600である(021、022、023)。

## おわりに

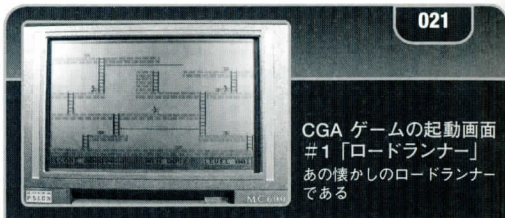
今回は緊急特集として、Psion製品でもダントツのレア度と怪しさを持つモバイル端末、MC600についてご紹介した。これよりももう少し正常なMC400については、後日また機会を設けてご紹介しよう。さて、次回はいよいよ、Early-Psionの世界に踏み込んで行く予定だ。既に筆者宅には膨大な数のEarly-Psion端末が増殖しまくっているので、これらをネタに書いてみたい。しかし、あまりにも多岐に渡るため、どうやってまとめようかと、今から頭を痛めている状況である……Sigh…



020

### ファイル閲覧ソフト MIELの動作画面

DOSの世界では有名であったMIELも動作する。ただし、残念ながらFDは起動できなかった



021

### CGAゲームの起動画面 #1「ロードランナー」

あの懐かしのロードランナーである



022

### CGAゲームの起動画面 #2「プリンス・オブ・ペルシャ」

このゲームも、DOS華やかなりし頃、それこそ鼻血が出るほどプレイしたものだ……



023

### CGAゲームの起動画面 #3「テトリス」

言わずと知れた名作「テトリス」